

## シカの行動を制御して効率よく捕獲する

関西支所  
研究コーディネータ

八代田 千鶴  
小泉 透

### 要 旨

全国的にシカが増え、森林・林業被害が深刻になっています。被害軽減には捕獲による個体数管理が有効ですが、狩猟者の減少に対応する必要があります。そこで、少人数で効率よくシカを捕獲するための誘引法を開発しました。この方法は、一定期間同じ条件で給餌作業を繰り返すことで条件付けを行い、銃器の使用が可能な日中に給餌場へシカを出没させる方法です。この誘引法と銃器による狙撃を組み合わせた誘引狙撃法を富士山国有林におけるシカ捕獲事業で実施し、高い捕獲効率を達成しました。同じ場所で短期間に繰り返し捕獲が可能であり、地域を限定してシカの個体数管理を実施する場合に適しています。

#### 新しい捕獲技術の必要性

全国的にシカが増え、森林・林業被害が各地で深刻な問題になっています。これまでは忌避剤の散布や防護柵の設置といった対策が実施されてきました。しかし、林業では生産現場とシカの生息地が重なっているため、被害を軽減するためには捕獲による個体数管理が有効ですが、これまで主に銃器を用いて捕獲を担ってきた狩猟者は減少し続けています。そのため、ワナを用いた新しい捕獲方法も開発されていますが、森林内では機動性が高いなど銃器の利用が適している場合も数多くあります。そこで、少人数の射手で実施できる新しい捕獲技術を開発しました。

#### 誘引法の開発

銃器の使用が可能な日中（日出から日没まで）にシカを誘引するために、一時的に設置した給餌場に同じ人が同じ時間に少量の餌を置く作業を一定期間繰り返し、条件付けによる学習効果を利用したシカの行動制御を試みました。その結果、給餌直後にシカの出没を誘導することができました（写真 1）。また、給餌期間中だけシカが出没することも確認しています（図 1）。この誘引法を用いて給餌場に誘引したシカを、銃器により確実に狙撃する誘引狙撃法では、少人数の射手で効率よく捕獲することが可能です。静岡森林管理署が平成 23 年度から 3 年

間実施した富士山国有林でのシカ捕獲事業では、1 日あたりの捕獲頭数は各年度で 12.2 頭、16.6 頭、11.8 頭と、射手 2 名で非常に高い捕獲効率（これまでの方法の約 40 倍）を達成しました。また、この事業の成果から、誘引狙撃法は特定の範囲内での繰り返し捕獲に適しているといえます。

#### 誘引に影響する要因

誘引狙撃法では、シカを自発的に給餌場へ引き寄せる誘引が重要となります。誘引効果は、シカの餌となる植物の量が少ない場合に高くなります（図 2）。そのため、積雪により餌植物を利用できない時期は強い誘引を持続させることができます。こうした条件を考慮して、給餌場の位置や実施時期を決めることが重要です。また、シカは警戒心が強いいため、イノシシのような他の野生動物が給餌場に頻繁に出てくると誘引効果は低下します（写真 2）。このような場所では、シカ以外の動物を誘引しない餌を選ぶ必要があります。人の気配もシカの警戒心を高めてしまうので、給餌期間中は不必要に立ち入らないなどの配慮も必要となります。

本研究は、農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業「林業被害軽減のためのニホンジカ個体数管理技術の開発」による成果です。



写真1 条件付けによる給餌場へのシカの誘引  
餌を置いて(9:50)から、26分後(10:16)に野生のシカが自発的に出沒しました。

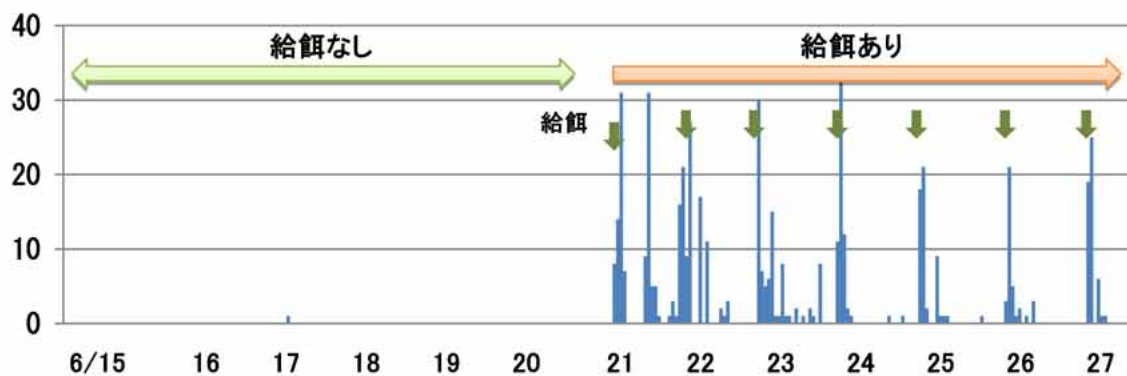


図1 給餌場でのシカ出沒回数の推移  
給餌を開始すると出沒回数が増加し、日数の経過に伴って給餌直後に集中するようになりました。

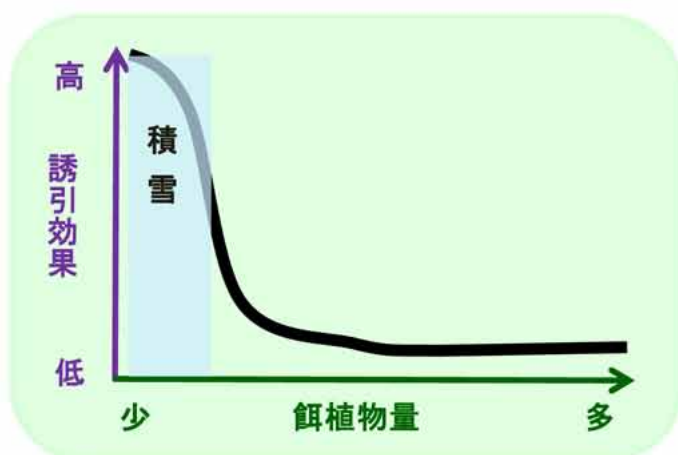


図2 給餌場周辺の餌植物量と誘引効果との関係  
餌植物量(横軸)が少ない場合に、誘引効果(縦軸)は高まります。積雪により餌植物が利用できない時期も強い誘引効果が持続します。



写真2 他の野生動物による誘引への影響  
シカの親子(左)が採食中の給餌場に現れたイノシシ(右)。シカは警戒心が強いため、他の野生動物が給餌場に頻繁に出てくると誘引効果が低下します。